”富士見市の昔話・その弐”

# 『狐の償い』

甘十楽

”富士見市の昔話・その弐”

## 『狐の償い』

甘十楽

この話も、婆さまがそのまた婆さまから聞いたものだそうだ。

「おーいッ、正吉さーん、朝からご精が出てるようだけど、まあ、ここへ来てひと休みしないかね、今、いもが焼けるところだから」と声をかけたのは、新河岸川の土手に近い畑で、干し草や稲わらを燃やしていた、東隣りに住む、長老の作兵衛さんだった。

「ハーイッ、ありがとうございます。今そちらへ伺います」答えたのは向う隣りの畑で熱心に仕事をしていた若者です。

ほんわかと、さつま芋の焼ける香ばしい匂いが、秋の野に漂い始めました。

「おやじさん、いつもお声をかけて下さりありがとうございます。今日もまたご馳走になります」

「いやーなんの、それより銀婆さんの具合はどうかね」

などと芋を喰べながら話していると、何時の間に来たのか、この辺りではあまり見かけない若く美しい娘

が、すぐ後に立っていて、「火にあたらせて頂いていいですか?」と話しかけて来た。

「あーいいとも、おーそうだ頂度いい、お前さんもひとつおあがりな」といって作兵衛さんが、大きめの芋をひとつとってあげた。

「ありがとうございます。ご馳走になります」、娘は恥じらいながらも芋を真中から二ツに折った。そして、ひとつを右手に持って口にし、もうひとつを左手に持って着物の裾を割ってお股の中に入れようとした。

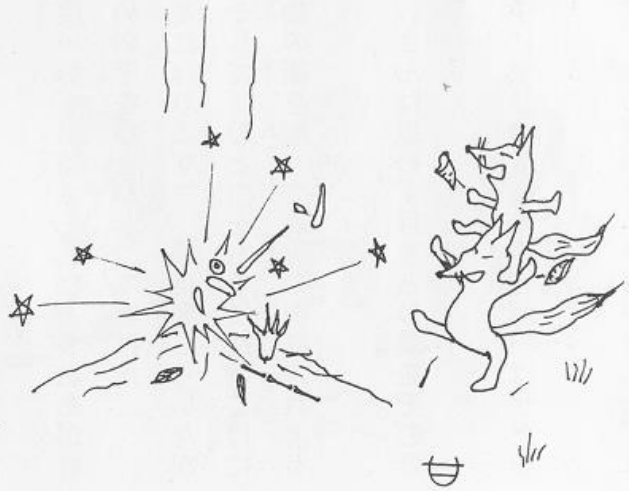
太股があらわになって、若い正吉さんは思わず目をとじ顔をそむけた。

その時、燃やしていた稲わらの中にまじっていた小竹が、はぜたのでしょう。

パーンッ、という大きな音と共に、火の粉がはじけ飛びました。

娘は驚いて、もんどりうって仰向けにひっくりかえりました。とたんにそれは肩車をした二匹の狐が、それぞれ芋を口にほおばりながら仰向けに倒れている姿に変りました。

「コラーッ、人をだます悪い狐とはお前達かーッ」と作兵衛さんが棒をふり上げながら怒鳴りました。とたんに二匹の狐はとびすさって、いちもくさんに土手の上流の、芦原の奥の方へ





と飛んで逃げて行きました。

「キャンッ」「ケーンッ」とそっちの方でけたたましい鳴き声が一回聞こえたようでした。

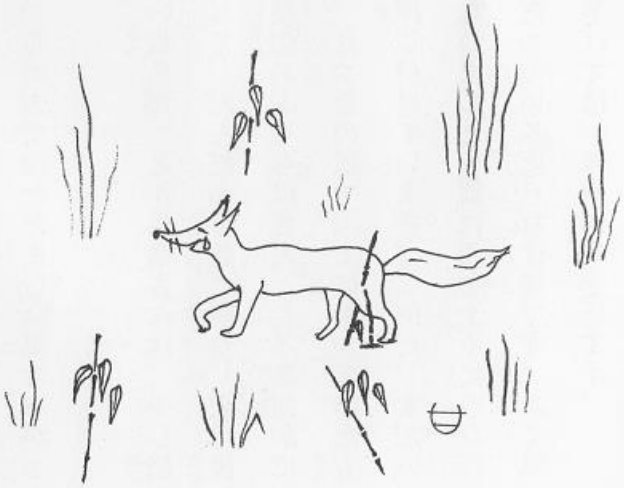
「人をだますなんてとんでもない奴らだ」と作兵衛さんは、少し怒りながらも、残りの芋を二人で喰べて、だんだん平静に戻り、火の後始末をしだしました。すると足の裏側のふくらはぎのところを何かに押されました。ふり返ると後ろに、さっきの狐で、上に乗っていた方のようです。近寄って来ては頭を押し付けています。「何だ、まだいたずらしようとするのか」と、どなりました。狐は頭を上下にうなだれて、あやまるように、何かをねだっているような仕種です。よく見るとまだ若い狐のようです。頭を下げては、芦原の方を見ます。

「何だ、もう一匹がどうかしたのか?」声をかけると、狐は、頭を

下げ下げ、芦原の方へ案内をするように進みます。

「正吉さん、ちょっと行って見てやるか」と二人は狐の後をついて行きました。

芦原を分けて入って見ると、少し小竹もあり、その奥にもう一匹の狐が、その小竹の切り株に、後足の太股のところをつらぬかせて、身動き出来ない状態になっています。あわてて飛ぶように逃げてくる際、切り株につきさしてしまったようです。





「あーあ、向うみずに逃げるからだぞ。しょうがない、正吉さん抱き上げてやっておくれ、わしがはずしてみよう」作兵衛さんが切り株をいっきにひき抜き、素早く股のきず口を押さえて、布を巻いて上げました。狐達だけでは、力も足らず助けを求めて来たことがわかりました。

作兵衛さんは、正吉さんに抱えてもらって家へつれ帰り、薬草をもんできず口にぬり、あらためて布でほうたいをしてあげました。

そんなことをしながら話しを聞くと、二匹は姉妹で、けがをした方が肩車の下になっていた姉だといい、妹もずっとついて来て、姉のそばでうなだれています。

「お前達はまだ若いのに、悪さをしちゃあだめだぞ。どうも近頃、狐に化かされたと評判がよくないぞ、この前も、志木に用達をして上沢へ帰ろうとする人が、江川の近くの『だんご屋』で、みやげを買っ

て重箱に入れ、それをぶらさげて谷津の森あたりへさしかかった時、美しい女に道を訪ねられ、親切に少し案内をしてから、家へ帰って広げてみると、重箱の中は空っぽになっていた。これは狐に化かされた、となげいていたぞ。これもお前達の仕業か？」

「はい、申し訳ございません。それは私達に化け方を教えるため、といって、お父がやったことです。」

「それからこんな話しもあったぞ、鶴馬にある親せきの酒屋の手伝いを終えて、南畑へ帰ろうとする人が、諏訪様の前で手を合わせて通り過ぎると、後から見たこともない美しい女に声をかけられ、誘われるままに酒をくみ交し、気持よくなって寝入ってしまい、気がついた時は夜が明けていて、田んぼの畦を枕に寝ており、親せきが持たせてくれたみやげの酒粕も、たばこ入れもなにもかも無くなっていたそう



だ、どうだこれもお前らの仕業か？」

「はい、どうもすいません。それもおっ母が化け方のお手本にと私達に示したことです。でも私達姉妹は、化け方は教わっても、人様のものを取ったりすることはやめようね。と話し合い、間もなく親離れをして、二匹で暮らすようになりました。」

「そうか、それはいいことだ、じゃぁお前達は悪さはしていないんだな。よかったな。どうだまだ痛むのか。しばらくは大事にして、明日、薬をぬり直してあげるから、またおいで」といって作兵衛さんは、門口まで見送ってあげました。

翌日は包帯をとりかえてもらいに来たし、それからはちょくちょく、訪ねて来るようになり、たまには自分達がみつけた山芋を、お礼にといってくわえて来たり、山ぎわのがけに生えている胡桃の木の下は、

あぶなくて人は近づけないからといって、その実を喰わえて運んで来たりして、作兵衛さんに割ってもらって、共に喰べたり「もうみやげなんかはいいんだよ。まぁこれでも喰べてお行き」といって出してもらう芋煮や、にぎりめしをご馳走になったりしては、遊んでいくようになっていった。

そんなある日、狐の姉妹が

「作兵衛さん、私達の親が悪さをしましたが、それは私達に化け方を教えるためだったので、その償いは私達がすべきだと思うんです。何か私達に出来ることはないでしょうか」という話になり

「それは、お前達自身がした事じゃないんだから、気に病むことはないよ。うん、だけどお前達がそこまで心に掛けているのなら・・・・お前達にしか出来ない事がひとつあるかも知れないなあ」と作兵衛さ



んは腕を組んだ

「なんですか、教えて下さいッ」と狐の姉妹は乗り出して来ました。

「実はなあ、お前達を抱えてくれた隣の正吉さんだがなぁ、年老いて寝たきりになっている銀さんというおばあさんと二人暮らしなんだよ。このおばあさんが頭もぼんやりしだしてて、時々昔の事が浮んで見えるらしく〝サワや、正坊にお乳をあげておくれッ〟なんて大声を出したりするらしいのさ。

そのサワさんというのは、銀さんの娘でな、正吉さんを生んで間もなく、正吉さんを銀さんにあずけて、生活費を送るために、江戸の親せきの呉服問屋へと、奉公に出て行ったんだよ、出かける日は朝から細い雨の降る日で、一才に近い正吉さんは銀ばあさんの背中におぶさって、鶉河岸から舟に乗って下って行くサワさんを〝かあか、かあか〟といって見送っていたっけ。

そして、サワさんからの仕送りと銀さんが汗水たらして働くわずかな畑仕事で正吉さんは育てられたんだよ。

それから二年、残念なことに正吉が三才になった夏、サワさんは江戸の流行病で、ぽっくりと亡くなってしまった。そんなつらい別れと、正吉さんを不憫に思う気持がつのって、銀ばあさんは、娘であるサワさんのことを忘れられず、特に身体が動かず頭がぼんやりしてしまった今では、正吉を生んだ頃のサワさんの事ばかりが浮んで来るらしいのだよ。

そこで、お前達の申し出なんだが、先の短い銀婆さんのために、サワさんを見せてやってはどうかと思うんだ。そして正吉さんに教わって、婆さんの介護も手伝ってもらえれば、それはそれは助かるんだがな。」



「それ、是非やらせて下さい。でも、サワさんてどんな人だったんでしょうね」

「それなら大丈夫だよ。正吉さんにそっくり生き写しの美人だったから、正吉さんをよく見れば、化ける事が出来るだろうよ」

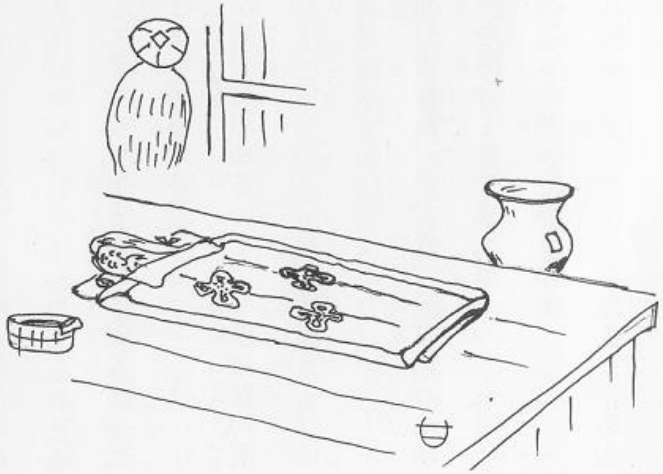
「そうですね。私はまだ少し足が痛む時があるので、今度は妹の肩車でやってみましょう」。

それから二・三日たった朝の事です。

「ただいまー、おっ母さんいま帰りました。正吉や、元気だったかい」といって、正吉さんの小屋の戸を開けてサワさんが入って来ました。正吉さんは作兵衛さんからこの話しを聞いていたので、「おっ母さんお帰り」といつて迎え入れましたが、夢に何度も見たことのある母の姿を目の前にして、胸が熱くなりました。

「おや、その声はサワかい、遅かったじゃないかい。マー坊がお腹をすかしてまっていたよ。早くオッパイを上げておくれ」銀婆さんは、うす目を開け、安心したような、うれしそうな顔になって、目のふちから涙を落しました。

「おっ母さん、長い間ごめんなさいね。これからはそばにいて尽しますからね」サワさんは、赤ちゃんにお乳を飲ませるふりを見せたあと、銀





婆さんのおむつを取替え、かいがいしく洗濯を始めました。

銀婆さんは、寝たきりのままでも、そんな様子を感じとり、うれしそうに涙を浮かべながらほほ笑みました。

それからは毎日のように「おっ母さんただいま」といって、狐の姉妹のサワさんはやって来ては、銀婆さんの口に食べ物を運んであげたり、おむつの世話をしたりし、正吉さんの手助けというよりは主になって、ほんとうの娘が母親にしているように尽しました。

そうして約一年たった、お日様のあたたかい日、銀婆さんはおだやかな安心したような笑顔で、浄土へと還って行きました。

「永い間ご苦労様だったね、お前達の事は正吉さんだけでなく、うわさを聞いた村の衆皆んなが感謝しているよ。私からも重ねて礼をいうよ。そして大きな償いが出来てよかったね」作兵衛さんが狐姉妹を

いたわりました。

「いいえ、短い期間ですもの、まだ償えたとは思っていません。作兵衛さん、またどなたか、お年寄りでお世話が必要な方がいれば、是非お手伝いさせて下さい」

こうして、その後、作兵衛さんの紹介で、もう一人のお年寄りを二年程介護を続けて、安らかに見送ってくれました。作兵衛さんは、

「永い間ご苦労様、もう充分過ぎる程、償いは出来たよ、お前達はまだ若いんだ、もうそろそろ自分達の幸せを考えなければいけないよ」

といたわり、おみやげに好物の油あげを持たせて送り出してあげました。

二匹は、振り返り振り返りしながらも、芦原の奥の方へと帰って行きました。



後になって、手助けを受けた正吉さん達が、新河岸川の土手の近くに、小さな木造の祠を造って狐塚とし、だんごなどを供えたそうだ、そうすると、それがいつしかくるみにとりかわっていたりしたこともあったそうだが、時がたつにつれ、だんごも、そのままひからびるようになり、正吉さん達も次の世代になったりして、いつしかその木の祠も朽ちはててしまったようだ。

だから、今となっては、それがどの辺りだったのか、見つけようがない。

終り

昔話「狐の償い」

発　　行　2007年6月1日
著　　者　甘 十楽（あまみ　じゅうらく）
印刷・製本　志賀堂印刷

※筆者の甘 十楽氏の了承を得て
　同冊子をコピーして開示しております。